

西南学院大学博物館 開館1周年記念特別展

納戸の奥のキリシタン

■ 生月島におけるキリスト教の受容と変容 ■





西南学院大学博物館 開館1周年記念特別展

納戸の奥のキリシタン

■ 生月島におけるキリスト教の受容と変容 ■

2007年 5月14日(月) ~ 6月30日(土)

〔主催〕西南学院大学博物館

〔協力〕平戸市生月町博物館 島の館



ごあいさつ

学院最古の歴史的建造物である旧本館・講堂の保存と活用のために、そして大学院および市民との連携をめざした施設からなる東キャンパスの中核として、つまりは学校法人西南学院および西南学院大学の顔として、2006年5月13日に開館いたしました西南学院大学博物館は、このたび開館1周年を迎えました。これを記念して特別展『納戸の奥のキリシタン-生月島におけるキリスト教の受容と変容-』を開催いたします。

開館以来、本博物館は誕生から東アジア伝播にいたるキリスト教文化の紹介をテーマとする展示を中心に、講演会・音楽会・学会などの活動を行い、また活用されています。2階講堂で行われる本学神学部のチャペルを生きた展示活動の一環として公開していますが、これなどは他では見ることのできないユニークな博物館活動と自負しています。「赤レンガの洋館でキリスト教世界と出会う」と紹介されたこともあります。不思議に郷愁をそそる赤レンガの外観と、80年余の間に生徒に踏まれ続けて磨り減って中央が窪んだ階段など、建物自体に心地良さを感じていただけるのも本博物館の大きな特徴でしょう。

さて本博物館は、入館者のうちの22%を大学生が占めるなど大学博物館として効果的に機能していると考えていますが、入館者の総数が少ないのも事実です。それは大学敷地内といういわば一般市民から隔離されたかのような環境もあるでしょうが、開館以来キリスト教文化に関する常設展示のみで展示に変化がないことも重要なマイナスポイントであると自覚しています。本博物館としましても、テーマをもつ特別展示を行い博物館に関心をもっていただきたいと考えておりましたが、その場がありませんでした。今回、常設展示室の横に特別展示室を整備できましたので、開館1周年記念展を皮切りに、今後は適宜特別展を開催したいと考えております。

イスラエルで誕生し、ヨーロッパで成長したキリスト教は、フランシスコ・ザビエルによって日本に伝えられました。目新しい文化と貿易上の利益をともなっていたので、最初のうちこそ歓迎され、その文化は南蛮文化として花を開かせましたが、やがて1587(天正15)年の豊臣秀吉による伴天連追放令にはじまる弾圧、そして禁教の苦難の時代を迎えました。1600年代前半はまさに苦難の時代で、これによってキリスト教の布教と信仰は壊滅的な打撃を受けてしまいました。1858(安政5)年、アメリカやオランダなど5ヶ国と修好通商条約を結んだ江戸幕府は居留地内部に礼拝堂の建設を認め、キリスト教にふたたびほのかな燭光が灯り、1873(明治6)年のキリシタン制札の撤廃によって新たなキリスト教の布教がはじまりました。

このような誕生から東アジア伝播、そして日本に根付いていくキリスト教の紹介、それに果たした西南学院の役割の紹介を、本博物館では活動の主要な目的としています。

1600年代中ごろからキリシタン制札の撤廃ごろまでの200年余は寺請制度、宗門改め、キリシタン制札、踏絵、五人組による連座制など厳しい江戸幕府のキリスト教禁教政策と厳罰の実施によって、キリシタン信仰は根絶したと考えられていました。ところがこの間も、キリスト教を信じる人びとは、表面的には神棚を敬い仏壇で先祖を崇めながら、秘かにキリスト教の信仰を守っていました。ここに苦難の時代においてもキリスト教への信仰を絶やさなかった人びとの知恵がみられますが、同時に宣教師の不在のためにキリスト教の教義がしだいに変容していくのはやむをえないことでした。

開館1周年の特別展ではこうした苦難の時代のキリスト教信仰を取り上げることになりました。長崎県平戸市の生月島は、かくれキリシタン信仰の島として知られています。その生月島でも、近年は、かくれキリシタン信仰が著しく退潮しています。そこで、今回、幸いにも平戸市生月町博物館島の館に深いご理解と全面的なご協力をいただき、キリスト教の受容と苦難の時代の知恵(変容)を示す多数の資料を紹介することにいたしました。

特別展の『納戸の奥のキリシタン』の名称は、かくれキリシタン信仰を続けた信者の苦悩と知恵を表現したものです。この展示を通して、私たちの祖先がキリスト教を守り通すために寄せた壮絶な信仰の深さに思いを馳せていただければと願っております。

2007年5月
西南学院大学博物館長 高倉 洋彰

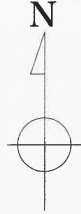
目次

- 2 ごあいさつ
- 5 生月島地図
- 6 図版
 - 6 津元の家の間取り/用語解説
 - 7 御神体埋納用壺
 - 8 オラシヨ本
 - 『旧キリスタン御言葉集』
 - 9 御前様組立式祭壇
 - 10 御前様オコクラ
 - 11 コンタツとメダイ
 - 12 ザビエルのメダイほか
 - 13 聖母子彩色メダイ
 - 14 十字架プレート
 - 15 お札様
 - 16 オテンペンシャ
 - 17 お水瓶
 - 18 お掛け絵「ロザリオの聖母子」
 - 19 お掛け絵「聖母子」
 - 20 お掛け絵「天使に囲まれた聖母子」
 - 21 お掛け絵「受胎告知」
 - 22 オマブリ
 - 23 マリア十五玄義図(参考図)
- 24 平戸地方キリシタン関係年表
- 25 参考文献
- 26 生月島のかくれキリシタン信仰
平戸市生月町博物館・島の館学芸員
中園成生

生月島の津元(垣内)

- ① 岳の下
- ② 種子・大久保
- ③ びわの首
- ④ 射場
- ⑤ ぜんじゃ
- ⑥ 堺目(連合)上・中・下宿
- ⑦ 辻
- ⑧ 小場
- ⑨ 上川
- ⑩ 正和1
- ⑪ 正和2
- ⑫ 正和6
- ⑬ 日草1
- ⑭ 日草2
- ⑮ 日草3
- ⑯ 山田1
- ⑰ 山田2
- ⑱ 山田3
- ⑲ 山田4

※●の番号は
展示物の出所地



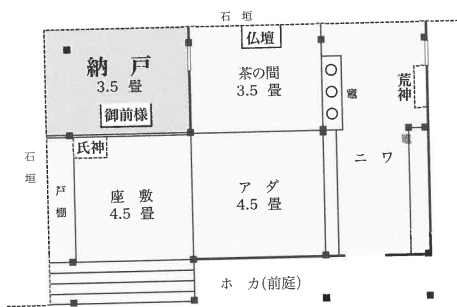
生月島地図



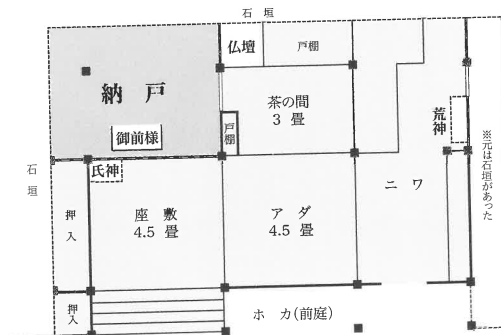
津元の家の間取り

昭和初期以降、信仰が外部に公開され、次第に隠す必要がない時代になっていきましたが、昭和初期に津元であった家の間取りには、潜伏時代の部屋や神々の祠の配置がまだ色濃く残っていたと思われます。江戸時代の終わりから明治時代にかけて建てられた一般的な母屋の構成では、ホカ(前庭)に面する以外の3面は、斜面を掘り窪め、コの字型に築いた石垣をそのまま外壁として用いている例が多く、外光や新鮮な空気が入るのはホカに面した一面のみでした。ここに示した図面では、竈などがある出入口から入ってすぐのニワとよばれる土間には、荒神の祠が配置されています。ニワに接する茶の間には、仏壇が配置され、座敷やアダには氏神が祀られています。そして一番奥まった納戸に御前様を、引き戸を開けただけでは直接外から見えづらい位置に配置しています。

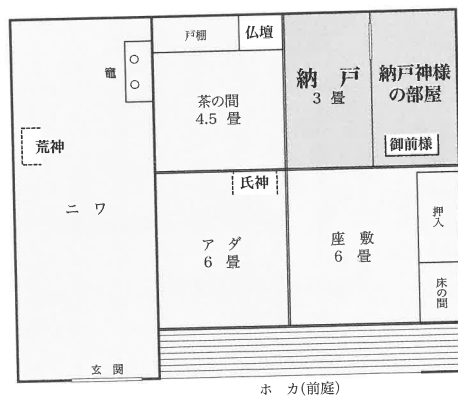
老部岳の下の家、昭和初期の間取り



堺目下宿のT家、昭和初期の間取り



堺目O家、昭和20・30年代から現在まで現存する間取り



用語解説

● 垣内・津元、小組・コンパンヤ

生島では、これまで主として農業集落である老部、堺目、元触、山田にかくれキリシタンの組織が存続してきました。これらの集落には各々複数の「垣内」「津元」という組があり、それぞれが複数の「小組」「コンパンヤ」に細分されます。

● 御前様

かくれキリシタン信仰において、垣内や津元という組単位で祀られている主な御神体のことで、その御神体の種類には関わらず御前様とよばれます。以前は、年に数回、主要な行事の際に臨時の祭壇を設けて祀るだけで、その他の日には目立たない木箱に納められ、納屋の隅などに置かれていました。しかし、戦後から今日に至るまでの間に、秘匿的性格がなくなり、座敷や専用の部屋、さらには御堂を設け、恒常的な祭壇を設けて祀る形に変化してきています。

● お掛け絵

神様の姿を描いた絵を軸装したもので、御前様として祀られる多くはこれです。描かれる像は、着物に髻姿など一見して和風の姿が多いですが、本来キリスト教聖画のモチーフに由来することが確かめられています。お掛け絵の多くは、古くなるたびに描き変えられてきましたが、キリシタン時代の作例は十字をはっきりと描き、禁教時代になると十字が消え、禁教解除後再び十字が描かれるといった変化も認められます。一見してキリシタンの御神体と判別できないようにわざと描き変えたり、先代のお掛け絵の構図を変えたり、略したりすることもあったため、元代の聖画を推定することが困難な場合もあります。また、潜伏時代以降には地元の殉教者像も描かれました。明治以降には新たにカトリックの聖画も加わりました。

● お洗濯

新しい御前様へとお掛け絵を描き換えることです。

● 隠居

新しい御前様への描き換えが行われて、「一線を退いた」先代のお掛け絵のことです。

● 親父役・御番主(ごばんぬし)

御前様を祀る家の主人で、御前様を祀るものを親父役または御番主といます。

● 御爺役

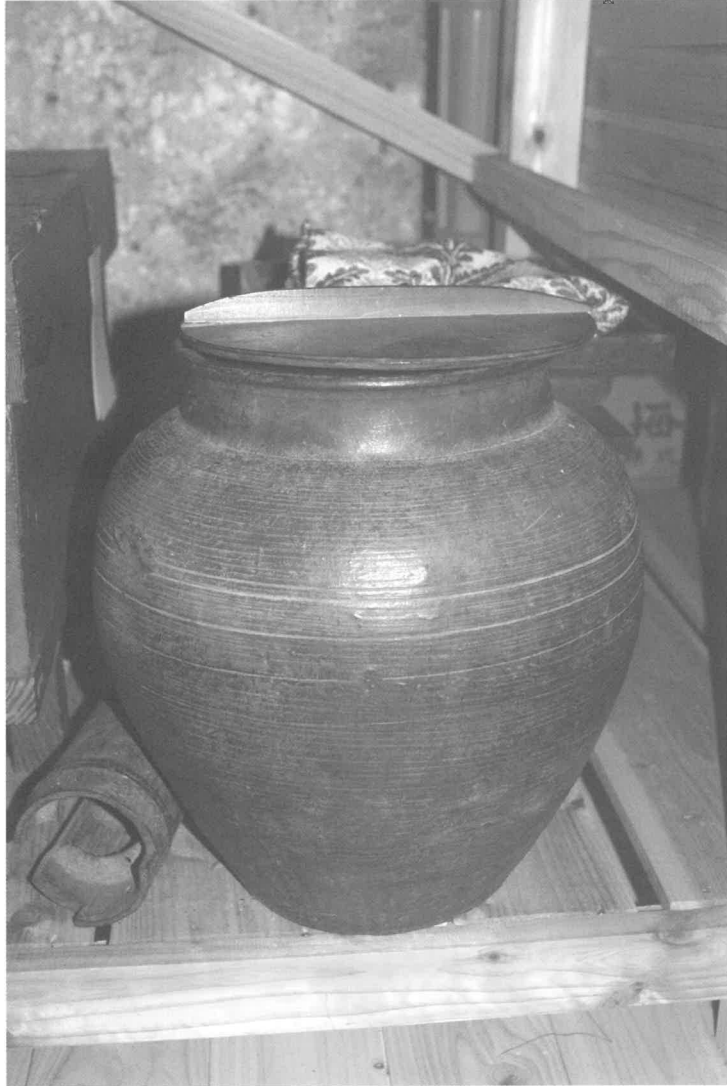
1つもしくは複数の垣内・津元に付随して、お授けとよぶ洗礼を主に受け持つ役職が御爺役です。御爺役は任期制で、任期中は夫婦の交わりを絶ち、牛の世話などの不浄を避けなければならないなど、厳しい禁忌が課せられます。

● オラシヨ・ゴシヨウ人

キリシタン時代に宣教師達によって伝えられた祈りの言葉は、潜伏時代以降も連綿と受け継がれて今日に至っており、これらをオラシヨ、またはゴシヨウ(後生、御書、御誦詞)とよびます。オラシヨの文句は日本語の他にラテン語やポルトガル語からなりますが、今はただ呪文として唱えられています。今日のかくれ信仰に関する諸行事でも、信仰対象に対するお務めとして、必ず唱えられます。オラシヨは、昔は必ず暗唱しなければならないものとされ、春の悲しみの期間(カトリックの四旬節にあたります。準節とは、復活祭の前の約40日をさし、復活祭に洗礼を受ける人びとの準備期間でもあり、回心と償いの期間でもあります。)の間に師匠から口伝えて教わりました。老部では、一通りのゴシヨウを習得し唱えることが出来る人をゴシヨウ人とよびます。

● 御弟子(みでし)・役中(やくちゆう)

小組やコンパンヤは、御神体としてお礼様を祀りますが、それを祀る宿の主人を御弟子といます。小組では、定期的に組内の信徒が集まって、イダギまたはオシカエとよばれる行事が行われます。なお、御弟子は、津元・垣内で行われる行事にも参加しますが、その際には役中とよばれます。



01

凡例

○各作品のキャプションは次の順によった。

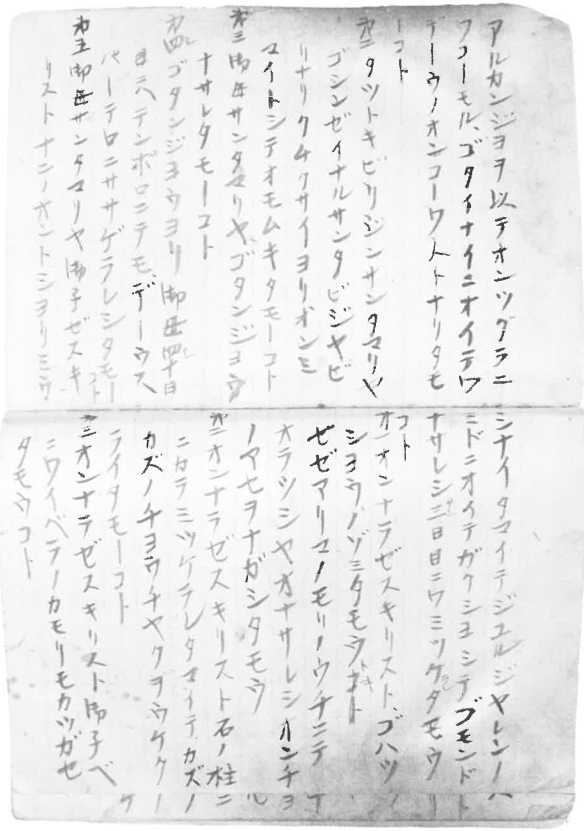
作品番号／作品名／時代／サイズ／出自／解説

01. 御神体埋納用壺

Vase for Concealing Objects of Worship

年代不詳 高36 径30 (cm) 山田

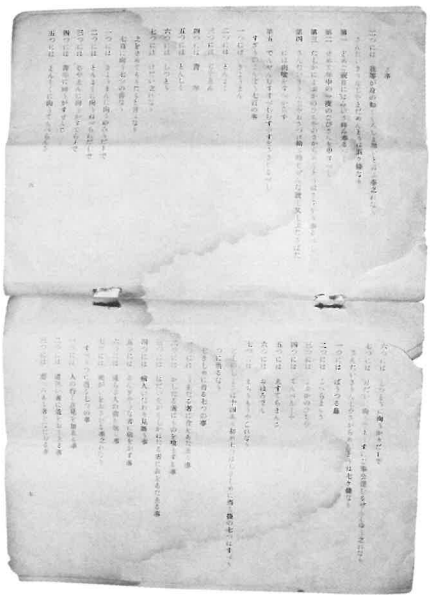
同じ地区の同様の壺に、御神体を隠すため埋納する際に用いたという伝承があります。禁教下の信仰形態を伺い知る事ができる資料です。



02



03



03

02. オラシヨ本

Prayer Book

昭和 縦21 横15(見開き30) (cm) 山田

オラシヨ本は、かくれキリシタンの祈りの文句であるオラシヨを紙に書き記したり印刷したりしたものです。オラシヨはもともと口伝に継承され、書いたものを見ることなく暗唱する形で唱えられてきました。しかしその内容は、慶長5年(1600)に出版された『どちなきりしたん』や『おらしよの翻譯』にある祈りとあまり違いはありません。禁教時代に入ると祈りを記した書物を所持していても捕らえられる危険があり、口伝、暗唱の形が取られたと考えられてきましたが、キリシタン時代の宣教師の報告にも生月島の信者達が祈りを熱心に覚えて唱えていたとあり、元からそのような形だったのかも知れません。復活時代を迎えると覚える助けになるように、口伝に聞いたオラシヨを書き記すようになったようで、戦後には研究者が記録を取った事に影響を受けてか、外部者の協力などを得ながら、オラシヨ本の印刷も行われるようになります。

03. 『旧キリスタン御言葉集』

Prayer Book

昭和27年 縦21 横15(見開き30) (cm) 壱部

同上



04



04. 御前様組立式祭壇

Altar-where holy objects were placed in the home

年代不詳 高120 幅68 奥45 (cm) 旧山田4垣内

かくれキリシタン信仰における御神体である御前様の古い祀り方は、日常は、木箱に御前様などを収納して納戸に置いておき、特別な行事の際に、納戸の中で、木箱を仮設の祭壇として利用して御前様を飾るといふものです。この資料は、古い御前様の祭祀形態をよく残しています。



05

05. 御前様オコクラ

Altar - where holy objects were placed in the home

年代不詳 高63 幅66 奥35 (cm) 旧正和2垣内

昭和初期以降、隠すという意識が薄れていくなかで、御前様を祀る場所も納戸から来客を迎える座敷へと変化しましたが、祭壇も組み立て式のものから、オコクラという宮型の木製祠や作りつけの祭壇を設けるなど変化していきました。



06

06. コンタツとメダイ

Rosary and Medallion

戦国～江戸 長12 (cm) 旧日草3垣内

キリシタン時代には、木製の玉を組み合わせて十字架を作る形のロザリオ(コンタツ)が用いられていて、高山右近の居城だった高槻城のキリシタンの墓地からも発見されています。本資料はコンタツに3つのメダイが付いたもので、メダイの1つは貝で作られた珍しいものです。



07



ザビエル面



ロヨラ面



天使面



銘文面

07. ザビエルのメダイほか

Medallion of Frances Xavier and Others

戦国～江戸 各長3.5と2 (cm) 旧正和2垣内

楕円形のメダイ中央の、胸襟を左右に開く仕草で仰ぎ見るような人物の周囲に「XAVIERIUS」の文字がある事から、中央の人物はフランシスコ・ザビエルである事が分かります。また反対の面には、ザビエルの同志であり、イエズス会の創始者であるイグナチウス・ロヨラが表されています。こちらは横向きの姿で描かれ、胸の前で合掌しています。キリシタン時代の生月島の布教が、イエズス会の主導で行われた事を窺い知る事ができる資料です。彼ら2人の仕草は、それぞれを示す特徴的な表現で、写真パネルで紹介する「聖母子と2聖人」を表したお掛け絵にもその特徴が引き継がれています。



08

08. 聖母子彩色メダイ

Painted Medallion of the Virgin with the Infant Jesus

戦国～江戸 長7 (cm) 館浦

鮮やかな色で描かれた聖母子達の像が納められ、蓋には、イエズス会を示すIHSの文字が刻まれています。



09

09. 十字架プレート

Relief of the Cross on a Metal Plate

戦国～江戸 縦16 横9 奥4 (cm) 旧正和2垣内

木製の板の上部に十字架、中程に梯子が掛かった十字架を浮き彫りにした金属板、下部に唐草模様の装飾が彫られた金属板が嵌め込まれています。



(表)

10. 11



(裏)

10. 11

10. お札様

Wooden Cards with the 15 Mysteries of the Rosary Used for Divination - refers to events of the life of Mary, showing her joy, sorrow and glorification

11. お札様

Wooden Cards with the 15 Mysteries of the Rosary Used for Divination

年代不詳 16枚1組 各縦3横2(cm) 堺目

お札は、縦の長さ3~5センチの木札で、袋や木箱に納められ、コンバンヤ(小組)の御神体として信仰されています。親様(お頭様)の札1枚と各5枚ずつの喜び様(元様)、悲しみ様(中様)、グレルオーザ様(先様)の札からなる計16枚が基本構成ですが、過不足がある場合もあります。喜び、悲しみ、グレルオーザの各札は、聖母マリアの生涯の物語を15の場面に分けた「十五玄義」の喜びの玄義(受胎告知からキリストの成長までの5つの出来事)、苦しみの玄義(キリストの逮捕から処刑までの5つの出来事)、栄えの玄義(キリストの復活からマリアの昇天までの5つの出来事)に対応しており、3種類の記号と番号を表す横線が墨で記されている他、各場面に対応したオラシヨ「十五くだり」の文句が記されています。お札様は今日、小組で行われるイタダキ(オシカエ)行事で、吉凶を占う札として用いられています。田北耕也氏は、ドメニコ会で行われた、ロザリオの玄義を書いた札を用いて行う一種の娯楽に関するものではないかと推測されていますが、「ロザリオの祈祷」の際に用いたり、教義の教育に用いたりした可能性も考えられます。



12

12. オテンペンシヤ

Penitential Whip - used for acts of penitence and purification

年代不詳 長50 (cm) 旧山田2垣内

麻の細繩を束ねて根本を括ったもので、繩には一文銭などを削って作った十字型の金属片をつけたものもあります。屋祓いや野祓い、「風離し」という病気祓いなどに用いますが、これ自体が御神体として祀られます。伝承では、悲しみの入りから上がりまでの46日間(カトリックでいう四旬節)に1日1本ずつ繩を撚り、計46本を束ねて作るとされていますが、実際の繩の本数は様々です。語源は、ポルトガル語のPenitencia(悔悛)で、元はヂシビリナと呼ばれる鞭打ちの苦行に用いられる鞭でした。布教時代の生月ではヂシビリナがよく行われていた事が、宣教師の手紙などに記されています。



13

13. オテンペンシヤ

Penitential Whip

年代不詳 長50 (cm) 旧日草3垣内

同上



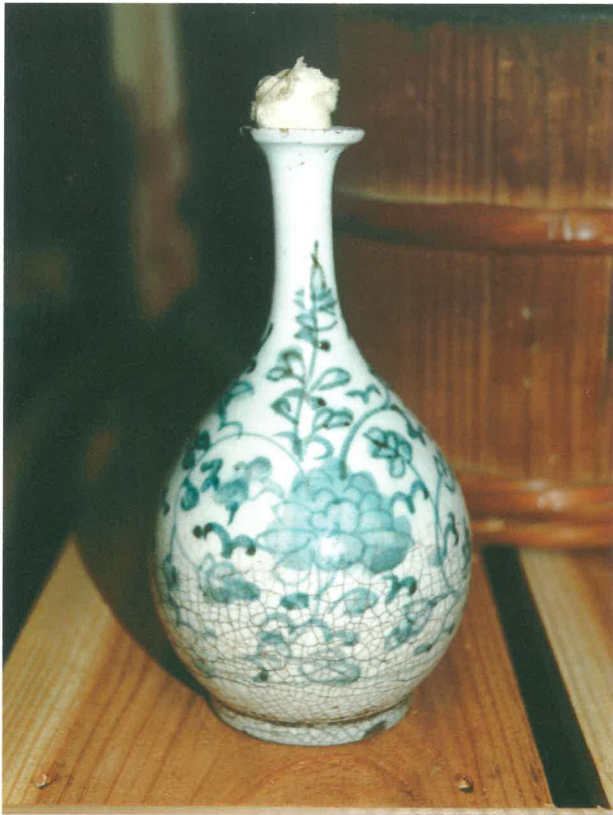
14

14. オテンペンシヤ

Penitential Whip

年代不詳 長25 (cm) 館浦

同上



15



17



16

15. お水瓶

Vase for Holy Water - brought from sites of martyrdom and used for baptism, purification, and protection from evil

江戸 高17 (cm) 山田

殉教聖地である中江ノ島でもにおもに採取されている聖水「お水」(サンジュワン様ともよばれます)を入れる壺で、これ自体が御神体とされています。お水は、信者がオラショを唱えないと湧き出ず、時が経っても減ることがないばかりか、持ち歩いているとかえって増える事もあるとされ、お授け(洗礼)の他、屋祓い、野祓い、身のお祓い(人のお祓い)などに用いられ、穢れを清め、魔物を退ける力があるとされています。キリシタン時代の宣教師の手紙の中に、信者が聖水を神聖視してそれを熱心に求め、病気治しなどに用いていたという記述があることから、聖水信仰もこの時代に起源が求められるようです。また別称から、キリストに洗礼を授けた洗礼者ヨハネに対する信仰も関係していると考えられます。

16. お水瓶

Vase for Holy Water

年代不詳 高20 (cm) 堺目

同上

17. お水瓶

Vase for Holy Water

年代不詳 高19 (cm) 御崎

同上



18

18. お掛け絵「ロザリオの聖母子」

Hanging Scroll "The Virgin of the Rosary with the Infant Jesus"

明治以降 縦67 横38(画面縦40 横32)(cm) 旧山田3垣内の隠居御前様

下部には雲中に三日月を配し、三方にロザリオが巡ります。月の上に立つ聖母は、乳房をはだけ、結った髪には十字を戴いています。本来ロザリオの大玉がある場所にも十字が記されています。このように十字をきちんと描くようになるのは、禁教解除後のお洗濯(描き換え)からだと考えられています。



19

19. お掛け絵「聖母子」

Hanging Scroll "The Virgin with the Infant Jesus"

昭和 縦112 横40(画面縦60 横27) (cm) 種子津元の隠居御前様

お掛け絵の中で最も多いのが、聖母子像を起源とするものですが、その中で本資料のように聖母子のみを単体で描いたものを単純型聖母子像に分類しています。基本的な構図は、三日月を踏みしめた立ち姿または歩き姿の聖母が、胸元に幼子を左抱きにするというものですが、本資料では足元に日月が配されています。



20

20. お掛け絵「天使に囲まれた聖母子」

Hanging Scroll "The Virgin with the Infant Jesus
Surrounded by Angels"

昭和 縦72 横27(画面縦30 横16) (cm) 旧正和6垣内の御前様

周りに軽やかに飛ぶ天使を配した、聖母子の像です。
聖母子の背後から、赤い光が放射状に発しています。



21

21. お掛け絵「受胎告知」

Hanging Scroll "The Annunciation"- God in heaven looking over the angel Gabriel bringing the news of Jesus' birth to Mary

年代不詳 縦40 横24(画面縦23 横17) (cm) 館浦

受胎告知は、大天使ガブリエルがマリアにキリストの懐妊を告げる場面で、キリスト教絵画で好まれた題材です。このお掛け絵では、聖母と翼を持つ天使が対面して座る形で描かれ、雲上にデウスとおぼしき男神を配しています。しかし、本来この場面に居ないはずの幼子イエスが、聖母の懐に描かれています。禁教時代以降、本来の教義が分からなくなったためだと思われます。



22

22. オマブリ

Talisman - paper crosses blessed with holy water and placed in the mouth for healing or hung in houses for protection against evil

年代不詳 縦7 横7 (cm) 山田

生月かくれキリシタンのオマブリは、多くは和紙を剣先十字に切り、オラショを唱えながらお水(聖水)を打って力を持たせます。屋敷いの時には、家の柱や玄関に付けたり、家人や牛に飲ませます。野祓いの時には、魔物が出そうな所に納めます。そして葬式の時には、故人の着物のたもとに入れます。このようにオマブリは、魔を祓う力があると考えられています。



23. マリア十五玄義図(参考図)

The 15 Mysteries of the Rosary and the Devotional Image for the Holy Sacrament, Colors on paper

17世紀初頭 縦76.5 横63.3 (cm) 茨木市下音羽 京都大学博物館蔵

この「マリア十五玄義図」(正式には「紙本著色聖母子十五玄義・聖体秘蹟図」)は、大阪府茨木市の山間部、かくれキリシタンの里として知られる下音羽の民家に伝えられた絵画で、1930年、屋根の葺き替えの際に発見されました。屋根裏の木材にくくり付けられた竹筒を不審に思った家人が開けてみると、この絵が巻かれた状態で出てきたのです。画面中央上段に幼子イエスを抱く聖母、下段には中央に光り輝く聖体(キリストの肉を表すパン)を戴いた聖杯(キリストの血を表す葡萄酒の象徴)とイエズス会の紋章、その左右にフランシスコ・ザビエル(中央右)やイグナチウス・ロヨラ(中央左)、それぞれのお背後に聖ルチア(右)と聖マティアス(左)の4人物が描かれています。そしてこれらの外側に、聖母子の生涯を描いた15場面が左下から時計回りに配置されています。これらの15場面は、5場面ずつ喜びの玄義(受胎告知からキリストの成長までの5つの出来事)、苦しみ(キリストの逮捕から処刑までの5つの出来事)、栄えの玄義(キリストの復活からマリアの昇天までの5つの出来事)に対応しています。それぞれの場面に対応した祈りの言葉があり、キリシタンは、ロザリオ(数珠)を練りながらそれを唱え、聖母に祈りを捧げました。それに対し、中央下段の場面は「聖体秘蹟」を表しています。聖体の秘蹟という儀式は、キリストの肉と血を意味するパンと葡萄酒を信者に分かつ儀式で、キリストとの生命の一体化を強める意味を持ちます。この図には、ロザリオのマリアへの祈りと聖体秘蹟への崇敬の両義が表されています。さて、この図を参考写真として取り上げたのは、同じくマリア十五玄義に基づく展示資料のお札様と写真パネルで展示しているお掛け絵「聖母子と2聖人」に関連性があるからです。お札様では、15枚の札が、絵ではなく文字で十五玄義を表し、親様の札が、聖母子に対応すると考えられます。また、この「マリア十五玄義図」に描かれた、聖母子とそちらを仰ぎ見る2人のイエズス会士、ザビエルとロヨラという組み合わせは、生月島のお掛け絵でも複数の例があります。描かれる人物達のポーズなどにも共通性があり、お掛け絵の原図となった作例は、キリシタン時代にもたらされたものかもしれません。さらに、胸襟を両手で左右に開く仕草で上を見上げるザビエルと胸の前で手を合わせるロヨラというポーズは、展示資料のザビエルとロヨラを浮き彫りにしたメダイにおける両人物のポーズとも共通し、この2人物の典型的な描き方として、広く日本のキリシタンの間に定着していたことを示します。

平戸地方キリシタン関係年表

		年号	西暦	事 項	
キリシタン時代	戦 国	大永6年	1526	石見銀山が発見され、以後中国への銀輸出が増大する。	
		天文3年	1534	パリでイグナチウス・ロヨラ、フランシスコ・ザビエルらによってイエズス会が創立される。	
		天文10年	1541	松浦隆信(道可)13歳で家督を継ぐ。親戚筋の籠手田安経、後盾となる。	
		天文11年	1542	倭寇の大頭目・五峯王直、平戸に居を構える。	
		天文16年	1547	最後の遣明船、大島、平戸、川内を経て中国に向かう。	
		天文18年	1549	ザビエル神父、鹿児島に到来、日本でキリスト教布教を開始。	
		天文19年	1550	ポルトガル船、初めて平戸に入港。ザビエル神父、平戸に来て布教を行う。	
		天文22年	1553	ガーゴ神父、平戸で布教。その後、籠手田安経、一部勘解由が入信する。	
		弘治元年	1555	松浦隆信、イエズス会インド管区長に手紙を出す。	
		永禄元年	1558	ヴェレラ神父、籠手田領(館浦、山田、堺目、度島、獅子、飯良)で一斉改宗を行い、山田、度島に教会が設立される。仏教界の反発でヴェレラ神父、松浦隆信から退去を命ぜられる。	
		永禄4年	1561	アルメイダ修道士が籠手田領で布教、度島改宗が完了。堺目、獅子、飯良、春日に教会が建つ。	
		永禄5年	1562	ポルトガル船5隻が平戸に入港。商取引のもつれから宮の前事件が起こる。	
		永禄6年	1563	ポルトガル船、大村領の横瀬浦に入港する。 トルレス神父、翌年にかけて籠手田領で告白を受ける。 横瀬浦が焼き討ちにあう。 フロイス神父、度島で冬を越すが、病気の上、教会を火災で失う。	
		永禄7年	1564	ポルトガル関係船3隻が平戸入港。平戸に天門寺(御受胎の聖母マリア教会)が建てられる。	
		永禄8年	1565	カブラル神父、一部領(一部在浦、根獅子など)の一斉布教に着手。一部に教会設立。 平戸の兵船、福田浦のポルトガル船を襲うが敗北(福田浦海戦)。	
		安土・桃山	永禄9年	1566	平戸松浦氏、飯盛城を攻略し相神浦松浦氏を降す。
			元亀元年	1570	長崎がイエズス会領となる。
			元亀2年	1571	平戸松浦氏、沓岐を領国に加え、江戸時代の藩領域をほぼ手中にする。
天正5年	1577		ゴンサルヴェス修道士、猪渡谷で布教を行う。		
天正10年	1582		籠手田安経(ドン・アントニオ)亡くなる。数年後一部勘解由も亡くなる。		
天正12年	1584		スペイン船、平戸に入港。		
天正14年	1586		ポルトガル船、久しぶり平戸に入港するも、九州征伐のため商品の取引無し。		
天正15年	1587		豊臣秀吉、博多で伴天連追放令を出す。 日本中の宣教師が平戸に集合し、セミナリヨ、コレジオも一時的に生月に移る。		
天正18年	1590		カリオン神父、生月で急死。		
文禄元年	1592		文禄の役勃発。籠手田氏・一部氏も従軍。 カルヴァリヤール神父、病没。		
慶長元年	1596		スペイン船サン・フェリペ号、土佐に漂着。二十六聖人長崎にて殉教。		
慶長4年	1599		松浦隆信亡くなる。松浦鎮信キリシタンに法要参列を強要。 籠手田安一と一部正治、信者600名を従えて長崎に退去する。		
慶長5年	1600		関ヶ原の戦い。 新教国オランダの船リーフデ号豊後に来航する。		
慶長10年	1605		山田にキリシタンの棄教を目的に修禅寺が再建される。		
慶長14年	1609		ガスバル西玄可の殉教。オランダ船平戸入港、オランダ商館建つ。		
慶長19年	1614		幕府、全国に「伴天連追放文」を出す。 イギリス船、平戸に入港。 高山石近ら信者マニラに追放、長崎の教会も破壊されるが、平戸藩も破壊に協力。 マニラから帰投の平山常陳船、英蘭艦隊に拿捕さる。宣教師が発見され平戸で拘留。 生月で棄教を強制する奉行に対し、信者が抵抗する。		
平戸地方における禁教時代	江 戸		元和6年	1620	カミロ・コンスタンツォ神父、五島で逮捕され、焼罪で処刑される。 カミロ神父を助けた生月などの信者、中江ノ島などで処刑される(元和の殉教)。
			寛永元年	1624	元和殉教の信者の家族、中江ノ島等で処刑される(寛永の殉教)。この頃まで宣教師が来る。
		寛永11年	1634	長崎で西六左衛門神父(トマス西)処刑される。	
		寛永13年	1636	長崎に出島を作りポルトガル人を移す。日本人の海外渡航の禁止。	
		寛永14年	1637	島原の乱。	
		寛永16年	1639	元平戸藩士・浮橋主水がキリシタンの訴えを起こし敗訴、伊豆大島に流刑(浮橋主水事件)。 ポルトガル人の来航、国内居住が禁止される。	
		寛永18年	1641	オランダ商館、長崎出島に移転。孩子岳(番岳)に遠見番所設置。	
		正保2年	1645	生月、獅子、根獅子でキリシタンの逮捕・処刑(正保の弾圧)。	
		明暦3年	1657	大村郡崩れで捕らえられたキリシタンのうち64人が平戸領で処刑される。	
		享保10年	1725	畳屋又左衛門、田中長太夫と共同で、館浦で捕鯨を始める。	
		文政6年	1823	生月里村(元触)の石工甚蔵、長州安岡港の突堤を完成させる。	
		文政9年	1826	平戸藩の生月御崎牧場廃止され、沓部、堺目、元触から信者が移住、信仰を続ける。	
		嘉永6年	1853	米提督ペリー浦賀に来航。開国。	
		元治元年	1864	浦上の潜伏信者、大浦天主堂のプチジャン神父と接触、再布教が開始される。	
		明治元年	1868	浦上の潜伏信者、信仰が発覚し諸国に流罪となる。	
		明治5年	1872	出口大吉兄弟、生月にカトリック教を伝道。	

	年号	西暦	事項	
復活時代	明治	明治6年	1873	明治政府、キリシタン禁制の高札を撤廃。
		明治11年	1878	山田の米倉伝作、西村藤之助、長崎でカトリックの伝道を受ける。
		明治32年	1899	宝亀教会(煉瓦・木造)完成。
	大正	大正元年	1912	山田教会(煉瓦製)完成。
		大正7年	1918	南田平教会(煉瓦製)完成。
	昭和	昭和4年	1929	現在の紐差教会(コンクリート製)完成。
		昭和6年	1931	平戸教会(コンクリート製)完成。
		昭和29年	1954	田北耕也氏、生月かくれキリシタンの現地調査を開始。
	平成	昭和58年	1983	田北氏の『昭和時代の潜伏キリシタン』出版される。
		平成4年	1992	堺目かくれキリシタンの三津元、焼山に御堂を建てて合祀する。
				根獅子のかくれキリシタン組織、解散する(平戸最後の組織)。



周辺地図

比較的近年に出版された参考文献の主なものです。

- アンジェラ・ヴォルペ、『隠れキリシタン』、南窓社、1994年。
- 生月町博物館・島の館編、『改訂版 生月島のかくれキリシタン』、生月町博物館・島の館、2002年。
- 岩崎奈緒子、『モノが語る マリア十五玄義図』、京都大学総合博物館ミュージアムショップ「ミュージアムショップ」、2006年。
- 神庭信幸他、「京都大学所蔵『マリア十五玄義図』の調査」、『国立歴史民俗博物館研究報告』第76集、国立歴史民俗博物館、1998年。
- 五野井隆史、『日本キリスト教史』、吉川弘文館、1990年。
- 坂本満、「マリア十五玄義図の図像について」、『国立歴史民俗博物館研究報告』第76集、国立歴史民俗博物館、1998年。
- 谷川健一他、「生月島の西海文化 隠れキリシタンと鯨」、『自然と文化』54号、日本ナショナルトラスト、1997年。
- 中城 忠、谷川健一、中園成生、『かくれキリシタンの聖画』、小学館、1999年。
- 東馬場郁生、『きりしたん史再考—信仰受容の宗教学—』、グローバル新書6、おやさと研究所、2006年。
- 皆川達夫、『オラシヨ紀行 対談と随想』、日本基督教団出版局、1981年。
- 皆川達夫、『洋楽渡来考:キリシタン音楽の栄光と挫折』、日本基督教団出版局、2004年。
- 宮崎賢太郎、『カクレキリシタンの信仰世界』、東京大学出版会、1996年。
- 宮崎賢太郎、『カクレキリシタン:オラシヨ-魂の通奏低音』、長崎新聞新書、2003年。
- 若桑みどり、「第13章 京都大学蔵『聖母十五玄義図』のザビエル像について」、ザビエル渡来450周年記念行事委員会編、『「東洋の使徒」ザビエルI-大航海時代におけるヨーロッパとアジアの出会い』、上智大学、1999年。

生月島のかくれキリシタン信仰

平戸市生月町博物館・島の館 学芸員 中園 成生

1. 歴史

(1) キリシタン時代

天文19年(1550)、中国(明)の銀需要の増大に対応して活発化した倭寇貿易で繁栄する平戸に、最初のポルトガル船が入港する。その情報に接し、前年鹿児島に上陸していたザビエル神父も平戸に現れミサを行った。時の平戸領主・松浦隆信は当初、カトリックの布教に寛容であり、信者となった者の中には、松浦氏の親族で重臣だった籠手田安経とその実弟・一部勘解由らがいた。彼らの領地である生月島、度島、平戸島西岸では、永禄元年(1558)と同8年(1565)に一斉(集団)改宗が行われる。これは同様の改宗形態が為された最初の事例だが、寺院を教会に転用し仏像を破壊した事で、仏教勢力の反発を招いた。ただその後暫くの間、永禄4年(1561)の宮の前事件のように時として衝突は起きたが、松浦氏とキリシタン・ポルトガル勢力の間の協調関係は、貿易上の利益を背景に辛うじて保たれた。しかし永禄8年(1565)、期待に反し大村領福田浦へ入港したポルトガル船を、松浦氏の船隊が攻撃し敗北した事で、両者は断絶に近い状態になる。天正15年(1587)に豊臣秀吉が伴天連追放令を発令した際には、籠手田・一部領に全国の宣教師が一時的に集結するが、平戸では教会が穀物の倉庫に変えられたりした。

当時の籠手田・一部領では、集落毎に教会や十字架がつくられた他、組織された信者の組では、日曜毎に組内の戸主が寄って行事が行われた。信者はラテン語やポルトガル語の祈りを暗唱し、聖水信仰や鞭打ち苦行が行われたという記録もあり、こうした信仰要素の多くが、禁教時代を経て、こんにちのかくれキリシタン信仰まで受け継がれている。

(2) 禁教時代

松浦隆信にかわって平戸藩主となった鎮信は、禁教の意図を鮮明にしたため、慶長4年(1599)籠手田安一と一部正治は、多くの信者を従えて長崎に退去している。松浦氏の直轄領となった生月島では、慶長14年(1609)籠手田氏旧臣で信仰指導者だったガスバル西玄可が家族共々処刑されている。慶長19年(1614)幕府は全国に「伴天連追放文」を出す。元和8年(1622)と寛永元年(1624)に、カミロ神父の潜入布教を助けた生月島などの信者とその家族が、中江ノ島

などで処刑されている。正保2年(1645)にも弾圧が発生しているが、この頃から平戸藩は、宗門改奉行や押役など取り締まるための役職の設置、五人組内の連座制、絵踏など制度面の整備に力を注いでいく。しかし信者は、見せかけの神棚や仏壇を祀りながら、キリシタンの信仰形態の保持に努める。一方精神面では、宣教師の不在で希薄化するカトリックの教義に代わり、地元殉教者への尊崇が重きをなしていく事で、次第にかくれキリシタン信仰(以下「かくれ信仰」)化していった。そうした過程で、メダイやお掛け絵などの聖具は、教会や組頭の家で祀られたものが、禁教初期には藁束、土中、洞窟などに隠されたようで、その後禁教が緩むなかで、信者の家の納戸に収め、行事のとき臨時に祭壇を設け祀る形になったと考えられる。なお生月島では、江戸時代中期から捕鯨業が盛んになり、島を本拠とする益富組は江戸時代後期には日本最大の鯨組になっているが、捕鯨要員として他地域の者も多く来島していた。また生月島民は積石工として高い技量を有し、玄界灘各地で築港等を手がけているが、その足跡は遠く長州藩領まで及ぶ。江戸時代の生月は、決して閉ざされた隠れ島ではなく、島民はむしろ、島外で盛んに経済活動を行いながら、地域社会と信仰を維持していたのである。

(3) 復活時代

明治6年(1873)明治政府によってキリシタン禁制の高札が撤廃され、新たなカトリックの布教時代が始まる。平戸周辺では、田平、平戸島北部・中部東岸などで、江戸から明治時代にかけて外海・五島系のかくれ・カトリック信者が移住し、また在来住民の布教も進み、各地に教会が建設されている。一方、従来からかくれキリシタン信仰が続いてきた地域では、生月島の山田などでカトリックに合流する動きが起きたものの、大多数はかくれの信仰形態を維持し続けた。しかし昭和初期以降、研究者に行事や御神体を公開するようになると秘匿意識は次第に薄れていく。生月島のかくれキリシタン信仰は近年、経済情勢の悪化や意識の変化による退潮傾向が著しく、平成12年(2000)に17組だった組数は、平成16年(2004)には僅か6組を残すまでとなっている。

2.生月島のかくれキリシタン信仰

(1) 組織

生月島では、これまで農業集落である壺部、堺目、元舩、山田にかくれキリシタンの組織が存続してきた。一方、漁業集落の壺部浦と館浦では、御神体を持つ家は多いものの、早くから信仰の形骸化が進んでいる。前述の4集落には各々複数の「垣内」「津元」という組があり、それぞれが複数の「小組」「コンパンヤ」に細分される。垣内の御神体(御前様)を祀る家は「津元」「宿」と呼ばれ、その家の戸主で、御前様を祀り信者の葬儀も行う役職を「親父役」「御番主」という。なお別に「お授け(洗礼)」を専ら行う「御爺役」という役職もあり、任期中は男女の交わりを断つなど精進を求められる。

(2) 信仰対象

主として御神体と殉教聖地からなる。

①御神体

かくれの御神体は、祀る場所から「納戸神様」と呼ばれる事もある。津元に祀られる御神体は「御前様」と呼ばれ、通常は納戸の木箱に仕舞われ、主な行事の時だけ仮設の祭壇を作って飾られたが、近年は、目立つ宮型のオコクラ(祠)や常設祭壇に祀られるようになっていく。小組の御神体である「お札様」、個人で祀る様々な御神体は、茶の間の戸棚等によく祀られる。御神体は大きく6種類に分類される。

メ　ダ　イ：銅などの金属を溶かして楕円形や円形、方形の型に流し込み、キリスト、マリア、諸聖人の像などを印したもの。御前様クラスでは5cmを超えるものもある。

お　掛　け　絵：神様の姿を描いた絵を軸装したもので、御前様の多くはこれである。着物に髷姿など一見して和風の姿が多いが、全てキリスト教聖画のモチーフに由来する事が確かめられている。比較的数が多い聖母子像には「聖母子と二聖人」「ロザリオの聖母」「受胎告知」等のモチーフが確認され、他にキリスト像、洗礼者聖ヨ

ハネ、聖セバスティアヌスに比定される図柄もある。お掛け絵の多くは、古くなる度に描き変えられたが、キリシタン時代の作例は十字をはっきりと描き、禁教時代になると十字が消え、禁教解除後再び十字が描かれるといった変化も認められる。明治以降には新たにカトリックの聖画も加わった。

お札様：木札16枚が基本で、1枚の親札と「喜び」「悲しみ」「グルリオーザ」に属する5枚ずつの札からなる。聖母の生涯を15の場面で示した十五玄義に由来するとされ、今日では小組行事で、札を引いて吉凶を占うために用いられている。

お水瓶：おもに殉教聖地・中江ノ島で採取された聖水「お水」を納める陶磁器の小壺。お水は行事の際、振り撒いて清めに用いるが、それ自体が神とされる。

オテンペンシャ：「お道具」とも呼ばれる麻の細縄を束ねたもの。元はキリスト教徒が苦行で用いた贖罪の鞭で、語源はポルトガル語のPenitencia（悔悛）に由来する。行事の中で様々な祓いに用いられるが、それ自体が御神体である。

コンタツ：先端に十字架やメダイを付けた数珠（ロザリオ）。一部だけが残る場合も多い。

その他、十字架、青銅像、プレート、一文銭、石なども祀られている。なお御神体ではないが、オマブリという和紙を切って作った剣先十字を魔除けとして、母屋や牛小屋に貼ったり、人に飲ませたり、死人に持たせたりしている。

②殉教聖地

概ね、キリシタン信者が殺された伝説を持つ場所で、「中江ノ島」「ガスパル様」のように宣教師報告で確認できるものもある。「中江ノ島」「ダンジク様」のように行事が行われる聖地もあり、また木や石を持ち帰ったり伐採したりする事をタブーとする場合もある。

(3) オラシヨ

キリシタン時代、宣教師が伝えた祈りは「オラシヨ」「ゴシヨウ」と呼ばれ、今日まで連綿と受け継がれてきた。オラシヨの文句は日本語の他にラテン語やポルトガル語からなるが、今はただ呪文として唱えられる。生月では男性のみが唱え、地区毎に構成や内容に若干の違いはあるが、普段唱えるオラシヨは概ね30タイトル程で、その全部を唱える「一通り」「一座」と一部を唱える「六巻」「半座」、六巻の中でキリアメマリアを七百回唱える「長座」の形がある。オラシヨは元々暗唱されたが、山田では戦後、本を見て唱えるようになり、元触では他地区の六巻のサイズに短縮されている。また後述の「お授け(洗礼)」や「戻し(葬式)」の時だけ唱える特別なオラシヨもある。歌われるオラシヨを「唄オラシヨ(オラシヨ)」というが、そのうち壺部の「ぐるりよーざ」は、かつてイベリア半島で唄われたグレゴリオ聖歌である事を皆川達夫氏が明らかにされた。一方、「パライゾの寺にぞ詣ろうやな」等、哀調な歌詞で知られる山田の「サンジュワン様の唄」「ダンジク様の唄」などは、永池健二氏によると、中世～近世初頭に仏教で唄われた和讃の影響が存在するとされる。



お授け

(4) 行事

① 人生儀礼

かくれの信者の家に生まれた子供や信者以外の家から嫁入り婿入りする者は、「お授け」という洗礼の儀式を受ける。対象者を「ヘコ子」というが、お授けの際には、親以外の夫婦共にお授けを受けている者でヘコ子と反対の性の者を「ヘコ親」に立てる。儀式では御爺役がお授けのオラシヨを唱え、ヘコ子の頭に聖水を付けて、「アニマの名前」(洗礼名)を授ける。アニマの名前には、男ならドメゴス、ジュワン、メンチョーロ、フランシスコなど、女ならドメガス、マリア、ジュワンナなどがある。



聖地 中江ノ島

壺部では、厄の者が壺部にある六ヶ所の御前様を巡る事があった。病気の際には御前様やお迎え様(中江ノ島)に平癒の願を立てた。また不慮の事故や原因不明の重い病になった者から、取り憑いているカゼを除くため、お水とおテン



堺目 御産待ち

ペンシャで病人の身体を祓う「風離し」という行事が行われたが、これが終わるまでは例え死んでも生者と見なされた。

かくれの葬式は「戻し」と呼ばれ、親父役が葬家に出かけ、親族に抱きかかえられた死者に向かってオラシヨを唱え、そのアニマ(魂)をパライズ(天国)に送る。僧侶の葬儀が終わって出棺した後は「屋祓い」が行われ、命日にもかくれの作法で法事が営まれる。

②年中行事

津元では、年間を通して多くの行事があるが、多くはドメーゴ(日曜日)に行われる。年の前半は、立春に近い水曜を「悲しみの入り」とし、その日を含めて46日間が悲しみの期間でカトリックの四旬節に相当し、その明けの日(丁度日曜にあたる)を「上がり様」すなわち復活祭として行事を行った。なお上がり様の1週前の日曜は「花」で、カトリックの枝の主日にあたる。年の後半は、冬至前の日曜が「御誕生」その前夜が「御産待ち」で、クリスマスとイブにあたり、盛大に行事が行われる。なお御誕生から8週遡った日曜が、死者を弔う行事「御弔い」の祭日で、さらにその8週前の日曜が「ジビリア様」でかくれの盆だという。

他に、苗代時分に行われる「作前」、田植え頃の「田祈祷」、麦の収穫前の「麦祈祷」など農業関係の行事も多く、また「屋祓い」「野祓い」など祓いの行事も多い。行事の基本は、男性参加者(の一部)がオラシヨを唱え、そのあと酒と肴、行事によっては御飯や汁、煮染め等をいただくというものである。壱部では、津元の年間行事のうち「正月」「上がり様」「御弔い」「御誕生」を主な日といい、昔はその時だけ御前様を箱から出して飾ったという。



壱部 屋祓い

編集後記

2006年5月13日に開館した西南学院大学博物館は、初めての特別展として、ようやくこの開館1周年記念特別展『納戸の奥のキリシタン―生月島におけるキリスト教の受容と変容―』の開催にこぎつきました。開館以来、当館は常設展示のみでしたが、やはり大学博物館と銘打って開館したからには、小規模であっても「当館ならではの」特別展を定期的に開催していかなければならないと考えてきただけに少しほっとしています。

今回は、平戸市生月町博物館島の館に全面的なご協力をいただき、生月島のかくれキリシタン信仰をテーマとした展示を行っております。これが当館初の特別展で、しかも当初学芸員室だった部屋を展示室IIとして改装整備し、その直後に本展がすぐ始まってしまうという「出来上がり」が想定しづらい状況の中で、準備を進めてきました。それだけに分からないことばかりで不安要素が多かったのですが、島の館学芸員・中園成生氏をはじめとした多くの方々のご協力で、無事開催の運びとなりました。本展をご覧いただきました来館者の皆様にも心より感謝申し上げます。

日本・アジアにおけるキリスト教資料の展示は、当館の主軸となる展示テーマのひとつであり、最初の特別展として、生月島のかくれキリシタン信仰を取り上げることが出来たことを大変嬉しく思います。

今後も当館は、西南学院大学の研究・教育の一拠点として、また大学と地域社会とを繋ぐ開かれた窓としての役割を果たすべく、定期的な特別展の開催を目指し、少しずつ収蔵資料も増やしていきながら、展示全体を拡充していく所存です。また、講演会や音楽会といった催しなどでも皆さんにご来館いただく機会を作っていきたいと思っています。博物館は、その中にいる関係者だけで作るものではありません。当館のような小規模館は、世界的に稀少で重要な資料の展示や豊富な資金で可能となるアトラクションをご用意できるわけではありませんが、来館者の皆さんの声が届きやすい場所と自負しております。今後も皆さんと共に当館を育てていきたいと考えています。応援をよろしく願いいたします。

2007年5月

西南学院大学博物館学芸員 米倉 立子

西南学院大学博物館 開館1周年記念特別展
『納戸の奥のキリシタン
―生月島におけるキリスト教の受容と変容―』図録

印刷・発行 2007年5月

編集者 米倉 立子
発行者 西南学院大学博物館
〒814-8511 福岡市早良区西新3丁目13-1
電話 092-823-4785
印刷所 凸版印刷株式会社



